Keyword 二世信者　学校　支援ニーズ　主体性

二世信者に必要な支援

–学校現場に着目して–

国際文化研究科 国際文化専攻
臨床心理学研究分野 博士前期課程
2025年3月修了

久冨 由賀

主査 三國 牧子　**副査** 中富 尚宏　小林 純子

研究背景

宗教のネガティブな面の一つとして宗教二世問題がある。宗教二世とは「特定の信仰・信念をもつ親・家族とその宗教的集団の元で、その教えの影響を受けて育った子ども世代」を指す（塚田，2022）。

2022年7月に起きた安倍元首相銃撃事件を皮切りに、宗教二世問題についての社会的な関心が高まりつつある。二世信者特有の心理的問題として、教団内での生活と家庭内での生活とのギャップから板挟みとなる苦しみ、多面的な人格の育ちにくさ（猪瀬，2002：小山，2016）のほか、脱会のしにくさ（猪瀬，2002）についても指摘されている。

研究目的

環境を変える力を持たず、親元を離れることができない時期である学童期や青年期の半ば頃までの期間では、家以外の主な所属先となる学校での支援が重要だと推察される。近年では児童相談所や市区町村等の相談業務を行う機関に向けた対応ガイドラインは拡充されつつあるが、宗教というテーマの特殊性から対応に躊躇うなど、実際の現場での対応は十分といえない現状がある（三菱 UFJリサーチ&コンサルティング，2024）。

そこで、本研究では二世信者の語り合いを通して、学校現場において二世信者に必要な支援について明らかにすることを目的とした。

研究概要

現在宗教から離れている二世信者の男女各1名を対象に、語り合い法を参考に半構造化インタビューを実施した。本研究は二世信者である筆者が行うもので、当事者研究であるといえる。そのため、研究者の背景や主観も分析の対象とする語り合い法を採用した。インタビューデータを逐語化し、メタ観察（鯨岡，2005）による分析を行なった。

結果として、二世信者に提供される支援と実際のニーズとの間にギャップがあることが示唆された。学校現場で二世信者が求める支援の形として、宗教に触れる機会を増やすことやピアサポート的な場の提供、キャリア教育等が挙げられた。児童・生徒が様々な宗教に触れる機会を増やすことは、二世信者自身が所属する宗教を相対的に比較し、脱会や継承といった今後の宗教との関係性を主体的に再構築することに繋がると考えられる。「自分の小さな世界だけじゃなくて」、宗教というものに学校で触れることで「学んだ上で自分で判断する力」を養い、親の宗教をどのように受け入れ、進んでいくかを二世信者自身が選べる力をつけることの大切さが挙げられた。
加えて、学校には「多様性を受け入れてほしいかな」と言う思いがあり、社会における宗教への偏見を減らし、二世信者が抱える生きづらさの軽減にも繋がるのではないかと示唆された。

成果・まとめ

学校教育の場で今すぐに二世信者が求める支援を提供することは難しいが、支援者にできることが何もないわけではない。本研究からは、特に若い世代の二世信者は自分が特殊な環境にいることに気がついておらず、困り感を持っていない可能性があることがわかった。こうしたことも考慮し、二世信者に対し、支援者は二世信者＝不幸といった固定化された図式を持たず、柔軟に対応することが望まれる。

指導教員コメント

彼女は学部の時から一貫して同じテーマで研究を続けてきていました。自身も二世信者であり、そのことを研究の利点として生かした今回の研究でした。二世信者は二世信者ではない人間が作った言葉です。二世信者自身は二世信者であることが「当たり前」であり、支援をどのように求めたら良いのか、あるいは支援を求める立場にあるのかが分かってないことが今回の研究で明確になりました。この研究の成果を心理職養成に活かすことが、私が彼女から渡されたバトンです。

三國 牧子